



Title	集団間差別の発生・発現に関する心理過程についての実験的研究
Author(s)	柿本, 敏克
Citation	大阪大学, 1997, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40105
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	柿本 敏克
博士の専攻分野の名称	博士(人間科学)
学位記番号	第12905号
学位授与年月日	平成9年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学 研究科 行動学 専攻
学位論文名	集団間差別の発生・発現に関する心理過程についての実験的研究
論文審査委員	(主査) 教授 白樺 三四郎 (副査) 教授 外山 みどり 教授 吉田 光雄

論文内容の要旨

本論文では、集団間差別現象とそれに関する心理諸過程について、個人差からの接近法と、注意の攪乱の実験的操作からの接近法を用いておこなわれた、2種類の実証的探究について報告する。

社会心理学における集団間関係研究の中心の1つである、社会的アイデンティティ研究では、集団間関係を説明する上で、個人のアイデンティティに取り込まれた集団成員性(=社会的アイデンティティ)の果たす役割が、重視されている。そこで、第1の実証的探究では、個人のアイデンティティへの集団成員性の取り込みと関連する個人差要因、「間人度」が、集団間差別といかに関わるかを探ることで、集団間差別においてそもそも社会的アイデンティティの概念が果たす役割について検討がなされる。他者への評価の多くの指標では、内集団成員への偏好現象(=内集団バイアス)とこの個人差特性との間に、正の関連が認められ、社会的アイデンティティ概念が一定程度、有用であることが示される。しかし、別のいくつかの指標で、この個人差特性の度合に関わりなく内集団バイアスが見られたことから、社会的アイデンティティとは別のメカニズムが作用する可能性が指摘される。

集団間関係研究では、集団間差別に、認知的要素と動機的要素の両者が関わりをもつことが、これまで理論的に主張されている。第2の実証的探究では、認知的要素として「認知的カテゴリー分化過程」(知覚的カテゴリー化に基づいて群間の差が強調されるメカニズム)が、また動機的要素として「社会的アイデンティティ過程」(内集団に有利な集団間比較によって集団自尊心を維持・高揚しようとする目標志向的過程)が取り上げられる。両過程の間に、意図性・自動性の次元で質的な差があるという前提の下に、この仮説的な2つの心理過程の作用を、データの上から例証することが試みられる。注意の攪乱は、一般に、意図的処理を妨害すると考えられるので、目標志向的で意図性の強い「社会的アイデンティティ過程」は、注意の攪乱によって妨げられるが、より自動的な「認知的カテゴリー分化過程」はその影響を受けにくい、と想定される。またこの命題は、集団成員性が顕著なときにのみ有効である、と提起される。

複数の実験操作と複数の測度、手続きを用いておこなわれた、3つの予備研究と6つの「最小条件集団」実験の結果を総合すると、前述の基本命題は概ね支持される。すなわち、注意の攪乱は、社会的アイデンティティ過程の指標と考えられる得点分配における内集団バイアスを、減少させる傾向が見いだされる。しかし、注意の攪乱の「度合」を考慮する必要があることも、明らかにされる。また、認知的カテゴリー分化過程の指標と考えられる評価評定、および新たに開発された「色バンド尺度」上での知覚的分化の度合には、注意の攪乱はほとんど影響を与えないことが

見いだされる。

最後に、第1と第2の探究の研究成果に基づいて、その理論的・実践的意義が考察される。

論文審査の結果の要旨

集団間の差別意識・感情の発生メカニズムを解明することは現代社会心理学に課せられた重要な研究課題の1つである。本研究は英国のTajfel,H.らが創案した社会的アイデンティティ理論に示唆を得ながら、厳密な実験室実験による実証的データによってあたらしい知見を得ている。

本論文ではまず関連する分野における先行研究の詳細な展望が試みられる。その過程においてTajfel,H.らによる「最小条件集団」とよばれる実験技法が本研究課題にとって最も適しているとの見解が得られた。本論文ではその最小条件集団実験場面において被験者の「注意の搅乱」条件を実験的に導入し、それらが自集団および他集団の評価に及ぼす効果を詳細に分析した。このため予備調査及び本実験を含め、英国及び日本における実証的研究を積み重ね、重要な示唆を得ている。特に本研究によって注意の搅乱の程度によって集団間差別意識に相違が生じるとの結果が見いだされた。これらの結果から集団間差別意識を生じさせるメカニズムの理解に貴重な知見が得られた。

よって本研究科課程博士（人間科学）の学位を授与に値する論文であると判断される。